資料紹介

御書院御物帳（御座飾帳）（同）
御書院並南風御殿御床飾（同）

鴻名喜明

（とうなきあきら）　（宮内庁務部附属研究員）
付けることが必要とされた。尚賀王の摂政政権地を朝鮮の「仕置」に次
の「覚」が入りている。「六六七年」

大安文之事

一、学文之事

二、算奨之事

三、筆法之事

四、醫道之事

五、容職方之事

六、立花之事

右之芸若彭中、達道禪三相上之御用可儀儀事、為前為銅鑄者也。

右之芸若彭中、達道三相上之御用可儀儀事、為前為銅鑄者也。阿嘉直譜は、一七三三年に生まれ、一七八四年

立花之事

四月廿三日

羽地

伊野波

髙志頭

所

書は尊王親王の流れを学び、有職故実は在番奉行所横田目役から伝授され

阿嘉直譜は、在番奉行以下の役人を接する任務を持つ大和横目を勤

め上げた人物で、その著名なのは、その活動の舞台としての、他大和芸能の稽古に励ん

や、その後に述べるように、王宮時代末期には八重山石垣島の地方役

層が畳を敷きながら、一七八二年、一七八三年に続く

和芸能が箱根彫刻などとして成立し、ひととおりは活まれていたことがうかがえる。

阿嘉直譜は、阿嘉直譜を含む、間即、江戸時代の絵巻、法眼、天明などの絵を家宝として秘蔵してい

」との名前で、このとき、阿嘉直譜が作成した「大和横目」を

在番奉行は前述の通り、一七八二年「琉球

番設置までは、三月にあったが、島津から送られた。琉球、在番奉行は三年の勤務で在職が定

在番奉行は前述の通り、一七八二年「琉球

番設置までは、三月にあったが、島津から送られた。琉球、在番奉行は三年の勤務で在職が定

在番奉行は前述の通り、一七八二年「琉球

番設置までは、三月にあったが、島津から送られた。琉球、在番奉行は三年の勤務で在職が定

在番奉行は前述の通り、一七八二年「琉球

番設置までは、三月にあったが、島津から送られた。琉球、在番奉行は三年の勤務で在職が定

在番奉行は前述の通り、一七八二年「琉球

番設置までは、三月にあったが、島津から送られた。琉球、在番奉行は三年の勤務で在職が定

在番奉行は前述の通り、一七八二年「琉球

番設置までは、三月にあったが、島津から送られた。琉球、在番奉行は三年の勤務で在職が定

在番奉行は前述の通り、一七八二年「琉球

番設置までは、三月にあったが、島津から送られた。琉球、在番奉行は三年の勤務で在職が定

在番奉行は前述の通り、一七八二年「琉球

番設置までは、三月にあったが、島津から送られた。琉球、在番奉行は三年の勤務で在職が定

在番奉行は前述の通り、一七八二年「琉球

番設置までは、三月にあったが、島津から送られた。琉球、在番奉行は三年の勤務で在職が定

在番奉行は前述の通り、一七八二年「琉球

番設置までは、三月にあったが、島津から送られた。琉球、在番奉行は三年の勤務で在職が定

在番奉行は前述の通り、一七八二年「琉球

番設置までは、三月にあったが、島津から送られた。琉球、在番奉行は三年の勤務で在職が定
「御書院御物帳」

文章中の「御書院御物帳」が、薩摩藩の御書院において、藩主が使用した御物帳を記録したものである。この御物帳は、藩主が使用した書物や按时を記録しており、藩主の生活を反映している。

また、この文書は、藩主が使用した書物の種類や、使用した筆や墨の種類、書物の大きさなど、詳細な記載がなされている。

この文書は、藩主が使用した書物の内容が、後世の研究者に示されており、藩主の生活の一部を知ることができる貴重な資料である。
三年にまたがるものであるから、両書は時期的にほぼ重なっていると見られることがある。

本文書には見える中国の著名な画家としては、唐寅、張図、蘇軾、軒等がいるが、中山伝信錄で知られる専門の冊封副使徐葆光の書を含まれている。

絵画は牧溪、顏輝、陳容、王翬、王渓、文徵明、劉松年、仇英、子昂等の作品があり、特に京都漂は描かれている。沖縄から派遣された画家を指導した福州の画家孫雲の絵もある。

日本画では狩野永徳、探真、常信、元信、海雲、安信、周信等狩野派の著名な画家が並んでいる。ほかに雪舟、等閏秋月、小場遠州、古田織部、一休、本村探元等の作品も見られる。書の方では藤原俊成、小場遠州、一休等の作品がある。

ここにあがった画家は、画家がいずれも一流の面ばかりといつてよいだろう。これらの書画は中国皇帝や天皇から賜り、自已の以外に、家臣から献上されたものや、時の在番奉行（訪問左右衛門）から献上されたものもある。

日本の書画は、薩摩に上国した使者あるいは江戸の行方で、狩野永徳や孫甥等の絵は絵を残せていたことがある。大和横目を勤めた阿嘉真親家に、狩野永徳や孫甥等の絵は絵を残せていたことがある。

彼らの書画は中国皇帝や天皇から賜り、自已の以外に、家臣から献上されたものや、時の在番奉行（訪問左右衛門）から献上されたものもある。

このようにした画業は、東京都美術館に存してある。大和横目を勤めた阿嘉真親家に、狩野永徳や孫甥等の絵は絵を残せていたことがある。

もちろんこれは冒頭の目録に見当たらないが、石鏡伝福（二八八二七四）に任じられていることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることが、家譜によって知られる。一七年四年には花鳥図十二枚、山水図二枚を描いて王府に献上していることがある。
（B）御座飾帳

七九〇七年七月から一七九三年正月に至る時期の記録で、
御座の回数は七

一御在番奉行井敷役衆の儀、為、上使御巡海被成候付那部御入津之

御在番奉行井敷役衆の儀、為、上使御巡海被成候付那部御入津之

（仲吉朝助編『古老集記類』）
座敷飾り・床飾りに使われる掛物、巻物、手鏡は、二を除いてすべて前述の御書院御帳に記載されているものばかりである。これからしても天井が装飾の必要から選ばれた書画は、鑑賞だけを目的としたのではなく、在番行者寄席の南殿や書院、鏡の間にすることで、昭和初期の段階においても里市立女子芸術学校の教室あるいは職員室として使われていた。当時教員として勤められた人々に選ばれ、内部は板なども取り払われ、もののが飾布配置がどうだったか明らかでないとのことである。したがって、床の間や違棚などの構えや向きについてても、古の帳戸に遺されていない。田辺泰造『琉球建築（昭和十二年刊）』にも詳細な間取には記載されていない。

本書によれば、南殿と書院に床と違棚があり、鏡の間には床のほかに違棚が設けられていることがわかる。以下、これら関係者以外の読者が、大井又五郎編『大和の建築』に収録されている関連用語には表をつけて、広辞苑に収録されている関連用語には花押・武、百人一首に用いられている。在番行者の南殿や書院、鏡の間に床とは違棚が設けられているということがわかる。以下、これら関係者以外の読者が、大井又五郎編『大和の建築』に収録されている関連用語には表をつけて、広辞苑に収録されている関連用語には花押・武、百人一首に用いられている。

座敷飾りの法式は、建築における書院造りの成立と步調を共にしたとされている。南殿や書院裏の違棚の室に床のほかに違棚が設けられていることがわかる。以下、これら関係者以外の読者が、大井又五郎編『大和の建築』に収録されている関連用語には表をつけて、広辞苑に収録されている関連用語には花押・武、百人一首に用いられている。

香炉や瓶、花器、香箱、鉢、印籠などには飾りが施されている。在番行者の南殿や書院裏の違棚の室に床のほかに違棚が設けられていることがわかる。以下、これら関係者以外の読者が、大井又五郎編『大和の建築』に収録されている関連用語には表をつけて、広辞苑に収録されている関連用語には花押・武、百人一首に用いられている。
「御書院並南風御殿御床飾」

権杖十五枚からなり

縦が二七・四

横の一〇

二三

で、袋線になっ

ている。筆者不詳。

羽地朝秀は、和室の装飾において、

坐具や座敷にあたる

とそれに近いものが

表に立つ。座敷を

小芸芸舎の「華花

若者」というassert

集に見えるが、

の間で行われていた

ていうことがあっ

たことについては、次項で述べる。

これについては、他に「石州流」や

「狩流」、「長楽流」と呼称がある

などが行われていた。

他には、島津家臣と

おもに上級人物から、

御使として直接伝授されたも

のがある。石川家家

の「手形」、

「四書」という

本家の「華花

若者」という

集に表れたもので、また

久田の蔵、「石州流」

名のいったもので、

のもので、楽しみに

も表れていることを

することができる。

一つのことが

できる。「御書院には、

床飾を示したものを

国際親善に於ける御

御成之時」とある

とよくあるよう

が、毛利氏の伝書

の名で、立花・

・華花の伝書

である。これには、

毛利が十一世

太土門から教伝された立花秘伝を記

述したものの、とある。

十一世太土門は生没年不明。江戸時代初期に

たして「松之色」を立てられ、書院には貴人を

させることの端を示すものである。

なお、それぞれの場合に行われる座敷飾りの記述の末尾には、月の名前

に近くされている。その時期にふさわしい掛物や、立花・華花が飾られたこ

とを示している。

こうした座敷飾りや立花・華花については、各種伝書をとりよせて調

べ、ときに座敷の家臣・おもはし人物からも、直接学んだことがあった

と云う。ことに、秀吉や喜多院の「華花若者」などは、その伝書が「丸田

忠兵衛」から一七〇〇年に「篠田親善」に伝えられたものとある。また

の伝書の「手形」、

「四書」という

本家の「華花

若者」という

集に表れたもので、また

久田の蔵、「石州流」

名のいったもので、

のもので、楽しみに

も表れていることを

することができる。

一つのことが

できる。「御書院には、

床飾を示したものを

国際親善に於ける御

御成之時」とある

とよくあるよう

が、毛利氏の伝書

の名で、立花・

・華花の伝書

である。これには、

毛利が十一世

太土門から教伝された立花秘伝を記

述したものの、とある。

十一世太土門は生没年不明。江戸時代初期に
まず、(1) 御婚礼御祝儀の時御書院御床三具足飾では、書院の床飾りは五具足とし、書院が本勝手であることから、三具足の立花は主居の側にあること、両側の花台は平置きにするのが従来の慣例であると述べる。摘図(2)にて。

これに対して本文書の筆者（以下筆者という）は、(3) 婚礼の場合は、二幅対の掛物の前に直心（すくしん）の対花を飾るようにと書物にあるが、旧例では、幅や長さをどのように理由で三具足飾とすることで、二幅掛物に花瓶二つではいきさか略儀見られるためか、どちらを本式とするか考えていて、立花掛物にて松の直心の対花も云々。とあるのみで、三具足のことはない。

なお同書取扱の花の項では、「陽の方には白花陰の方が赤花を用なされ」・「立花瓶を立て合わせることになってしまっているが、このように法式もあるのだ」と述べている。摘図(3)にて。

(2) 御婚礼御祝儀御行奉行御祝儀時御書院御床三具足飾においては、従来の慣例では「三具足諸飾」とされているが、三具足諸飾は当

は、従来の慣例では「三具足諸飾」とされているが、三具足諸飾は当
が「立花聞書」の記述に沿って二幅対、真心の対立花に改めてかもわからない
（は）「同時南風御黒御」の項では、婚礼祝儀の時、伝書通りに二幅対、

合せ写的立花瓶・とだろうだろうかと預言している（挿図）。

本文書の筆者は、もっとも婚礼祝儀の面から伴飾りの様式を問ってい
る。しかし、婚礼祝儀の御成之時では本来伴飾りが違う。そうすると

と、婚礼祝儀に在奉行行を「御成」なるならば、南殿・書院の伴飾りはど

うなるのか。

「立花聞書集」では「御成飾」とは幅対に三具足の対の立花、すなわち

諸飾を本式とし、これに準じて略式も可能だとしている。この通りが、

すでに十六世紀後には武家屋敷における正式の「御成飾」とされていった

ことや、文禄・元年甲寅御成前には武家屋敷における正式の「御成飾」に改められた

と、「文禄・甲寅御成」前には在奉行行から「御成」となれば、南殿とも書院

の伴飾りはどうなるのか。

「立花聞書集」では「伴飾」とは幅対に三具足の対の立花、すなわち

諸飾を本式とし、これに準じて略式も可能だとしている。この通りが、

すでに十六世紀後には武家屋敷における正式の「御成飾」を問ってい
る。しかし、婚礼祝儀の御成之時では本来伴飾りが違う。そうすると

と、婚礼祝儀に在奉行行を「御成」ならならば、南殿・書院の伴飾りはど

うなるのか。

「立花聞書集」では「御成飾」とは幅対に三具足の対の立花、すなわち

諸飾を本式とし、これに準じて略式も可能だとしている。この通りが、

すでに十六世紀後には武家屋敷における正式の「御成飾」を問ってい
る。しかし、婚礼祝儀の御成之時では本来伴飾りが違う。そうすると

と、婚礼祝儀に在奉行行を「御成」となれば、南殿・書院の伴飾りはどう

なるのか。

「立花聞書集」では「伴飾」とは幅対に三具足の対の立花、すなわち

諸飾を本式とし、これに準じて略式も可能だとしている。この通りが、

すでに十六世紀後には武家屋敷における正式の「御成飾」を問ってい
る。しかし、婚礼祝儀の御成之時では本来伴飾りが違う。そうすると

と、婚礼祝儀に在奉行行を「御成」となれば、南殿・書院の伴飾りはど

うなるのか。

「立花聞書集」では「伴飾」とは幅対に三具足の対の立花、すなわち

諸飾を本式とし、これに準じて略式も可能だとしている。この通りが、

すでに十六世紀後には武家屋敷における正式の「御成飾」を問ってい
る。しかし、婚礼祝儀の御成之時では本来伴飾りが違う。そうすると

と、婚礼祝儀に在奉行行を「御成」となれば、南殿・書院の伴飾りはど

うなるのか。

「立花聞書集」では「伴飾」とは幅対に三具足の対の立花、すなわち

諸飾を本式とし、これに準じて略式も可能だとしている。この通りが、

すでに十六世紀後には武家屋敷における正式の「御成飾」を問ってい
る。しかし、婚礼祝儀の御成之時では本来伴飾りが違う。そうすると

と、婚礼祝儀に在奉行行を「御成」となれば、南殿・書院の伴飾りはど

うなるのか。

「立花聞書集」では「伴飾」とは幅対に三具足の対の立花、すなわち

諸飾を本式とし、これに準じて略式も可能だとしている。この通りが、

すでに十六世紀後には武家屋敷における正式の「御成飾」を問ってい
る。しかし、婚礼祝儀の御成之時では本来伴飾りが違う。そうすると

と、婚礼祝儀に在奉行行を「御成」となれば、南殿・書院の伴飾りはど

うなるのか。

「立花聞書集」では「伴飾」とは幅対に三具足の対の立花、すなわち

諸飾を本式とし、これに準じて略式も可能だとしている。この通りが、

すでに十六世紀後には武家屋敷における正式の「御成飾」を問ってい
る。しかし、婚礼祝儀の御成之時では本来伴飾りが違う。そうすると

と、婚礼祝儀に在奉行行を「御成」となれば、南殿・書院の伴飾りはど

うなるのか。
あり。美術工芸史、芸能史研究の資料として重要である。また個別
に見れば建築史、表具史などの分野からも見落とせないだろう。

紹介者の未熟から誤謬、誤解があると思われる。関係者の御指摘を
賜われば幸いである。解詁、解説にあたっては、島風呂太郎氏をはじめとす
る球陽研究会の先生方と池坊教授総督名幸市先生、教育庁文化課上
江洲敏夫氏に、貴重なる御教示と資料提供をいただいた。記して感謝の意
を表したい。

本文および註に記述のあらかじめ参考資料は、次の通りである。

1. 東風稿原文
2. 阿賀直譜遺文
3. 阿賀直譜遺文
4. 沖縄方言謡曲
5. 沖縄文化論
6. 中山世著
7. 沖縄方言謡曲
8. 沖縄方言謡曲
9. 近代地方資料
10. 沖縄方言謡曲
11. 沖縄方言謡曲
12. 仲村洋助
13. 近代地方資料
14. 沖縄方言謡曲
15. 沖縄方言謡曲
16. 沖縄方言謡曲
17. 沖縄方言謡曲
18. 沖縄方言謡曲
19. 沖縄方言謡曲
20. 沖縄方言謡曲
21. 沖縄方言謡曲
22. 沖縄方言謡曲

訳

「けいはな伝書」
「三川集」

注

1. 参用数字は資料表にある。
2. 参用数字は資料表にある。
3. 参用数字は資料表にある。
4. 参用数字は資料表にある。
5. 参用数字は資料表にある。
6. 参用数字は資料表にある。
7. 参用数字は資料表にある。
8. 参用数字は資料表にある。
9. 参用数字は資料表にある。
10. 参用数字は資料表にある。
11. 参用数字は資料表にある。
12. 参用数字は資料表にある。
13. 参用数字は資料表にある。
14. 参用数字は資料表にある。
15. 参用数字は資料表にある。
16. 参用数字は資料表にある。
17. 参用数字は資料表にある。
18. 参用数字は資料表にある。
19. 参用数字は資料表にある。
20. 参用数字は資料表にある。
21. 参用数字は資料表にある。
22. 参用数字は資料表にある。
図(A)の２ 首里城南殿平面図（田辺泰著『琉球建築』より）

図(A)の３ 首里城書院および鎮間平面図（田辺泰著『琉球建築』より）
図（B） 押板と違棚（『御侍記』より）

図（C） 書院飾り（群書類従本『君台観左右帳記』より）
図（D） 三重の若松合せ真之立花（大井ミノブ編『いけばな辞典』より）
御座飾帳

御奉行御招請之時

公事帳部方

兼並筑親雲

御座飾

御首途御招請之時

年頭御招請之時

御床御掛物一幅西崖之筆山水之絵立花一瓶

御違棚

南風御殿

御手禽一折歌仙盒二載

北

銅之鏡子

びすきの内御茶置

下

北表六尺縁六帖形一番目壁本御奉行御儀思物掛居

御右筆座

台子一組御茶具箱

御取付之間

北表高敷之壁本御役？衆刀掛居

同所北表壁本丁子風呂居

御番所

御首途御招請之時

乾隆五十五年庚午御奉行河野外記録御役；衆御首途御招請之御時

横目付、衆年頭御申入之時

同御首途御申入之時
御座
御懸物
幅尺寒筆山水之餘松之一色

楽之間

南活花

御座
御懸物
幅尺寒筆山水之餘松之一色

御座
御懸物
幅尺寒筆山水之餘松之一色
同時南風御殿御床飾

御床御掛物二幅立花華立花両幅立花華

付

時御焼け

同時御焼き

時御焼け

同時南風御殿御床

掛図（次ページ）

同時南風御殿御床

掛図（次ページ）

同時南風御殿御床

掛図（次ページ）

同時南風御殿御床

掛図（次ページ）

同時南風御殿御床

掛図（次ページ）

同時南風御殿御床

掛図（次ページ）